

盂蘭盆の話

村尾節三

盂蘭盆はうらぼんと云ふ、盂蘭は死者の倒に懸られたるが如きの意、盆は食を盛る器の名、倒懸の苦を救ふの義なり、略して單に盆とも稱せり。七月十五日家毎に祖先及び亡者の靈を祭りて供養をす、之を精靈まつりと云ふ、其起源は、目蓮尊者の亡母の在處を求め、餓鬼中に生れて飢ゆるを知り、食物を食せしむるに、食はんとすれば、火となりて燃えあがりぬ、目蓮悲しみて、釋迦牟尼佛に申せば、釋迦牟尼佛云はく、七月十五日は佛歡喜し、僧自恣する日なり、其日百味飲食の物を鉢に盛りて、衆僧に供養せば、母の苦しみを救ふ事を得べけん、目蓮其言に従ひ、母の苦患を救ひたりと云ふ故事に因れるなり、我國にては推古天皇の時、每寺七月十五日に齋を設けしを以て始とす、次で齊明天皇三年七月に、飛鳥寺の西に、須彌山の狀を作り、盂蘭盆會を設けたる事あり、王朝時代には、十四日に清凉殿の東孫庇にて、主上の御拜あり、御幼年の時に行はず、十五日に太政官にて、供養の物を諸寺に送り、鎌倉幕府の時には、盂蘭盆會の時、勝長壽院に於て萬燈會を行へり、寺院にては、盂蘭盆會を行ひ、施餓鬼を行ふ、又民間にては、近世七月十二日草市又は盆市と云ひて、供物器具等を賣る、十三日迎火を焚きて、祖先等の魂を迎へ、供物を獻じ燈籠を懸けなどす、僧侶は柵經と稱して、檀家に行き、精靈棚の前にて讀經す、十五日若しくは十六日に、送り火を焚きて亡魂を送れり、地方により、迎火送り火とて、其夜墓前に大なる雪洞を懸くる事あり、又盆踊と稱して、街巷に男女相集り、唱歌して踊れり、今僅に地方に存せり。